

## 研究結果報告書

### 「古事記」の成書と「帝王世紀」の関係に関する基礎的研究

所属：香港城市大学 アジア・国際研究学科

役職：副教授

氏名：王 小林

「『古事記』の成書と『帝王世紀』の関係に関する基礎的研究」のプロジェクトの進行状況ならびに現在に至るまでの成果についてご報告申し上げます。

表題のプロジェクトは、『古事記』と中国六朝時代に成立した史書『帝王世紀』との関係を手掛かりに、『帝王世紀』が『古事記』の成立過程及び上代日本における歴史意識の形成に与えた影響ならびに意義を究明しようとするものである。この問題は筆者によって提起され、まずもって短い論文の形で京都大学発行の『国語国文』（2015年4月）に掲載されたが、貴財団の助成金を受けたことをきっかけに、従来の研究よりも広い視野から『古事記』の成立とその意義について研究できるように、二つの出版計画が立てられた。

一つは、筆者の執筆による『古事記と東アジアの歴史世界』という書物であり、もう一つは、当該分野の研究者たちとの連携による、共著『帝王世紀と古代日本』という書物の準備である。

まず、前者については、昨年9月以来、資料の収集と日本人学者との交流に基づき、原稿の執筆が順調に進み、現在のところ11万字に及んでいる。最終計画の16万字に達した段階で出版する予定である。出版について、既に昨年12月、東京にある出版社汲古書院と具体的な相談をしており、来年6月から7月までの間に原稿を交付する見込みである。先に提出した「研究内容要約書」に「『帝王世紀』と『古事記』の構成、表現などを比較研究することによって、律令国家として出発しようとしていた七、八世紀の日中間の文化交流の実相と歴史意識のあり方、その相違や特徴を探索する新たな視点をも提供しようとするものである」と書いたが、今回の研究の中で、比較研究をすることによって明らかになった事項は次三つの点に纏められる。①『古事記』は構成、表現などにおいて『帝王世紀』との類似点が見られる。原因として、紀伝体という中国正史の歴史意識に抵抗する形で、ある特別の家系を記録する「葉書」、「世本」を源とする編年体の体裁に相似の歴史意識を認めた可能性が考えられる。『日本書紀』の編纂において指摘されたことがあるものの、『古事記』に関しては筆者が最初の指摘者となる。②『古事記』の天皇記事には、中国古代の神秘思想——讖緯思想の影響が見られると同時に、その受容には、日本古来の「神」をめぐる観念と抵触し、変容する現象も見られる。そうした抵触と変容が、中世日本の説話に意外な形で受け継がれた。この点、中世説話の研究者にはまだ言及されていない。③『古事記』における漢籍の受容は、『日本書紀』が漢籍の類書をそのまま引用するのと違って、『三国史記』と『三国遺事』などの朝鮮資料を物語の構成や潤色に反映させている。特に後世に発達したいわゆる貴種流離談の祖形なるものがこの過程において形成された点は、注目すべき現象である。以上三点がこの度の調査の中で特に明らかになったものであり、現在表題との関連性と、『古事記』研究におけるその意義について分析を行っている。

後者については、中国武漢大学歴史学院陳偉教授、香港浸会大学中国文学科陳致教授、早稲田大学文学学術院稲畑耕一郎教授との共同執筆による『帝王世紀と古代日本』の出版である。具体的な分担として、それぞれ陳偉氏は「帝王世紀と中国歴史書の成立」、陳致氏は「帝王世紀の文体と思想」、稲畑氏は「帝王世紀と中国の皇帝史」、筆者は「古事記と帝王世紀」の章を執筆することになっており、これに『帝王世紀訳注』と上海図書館蔵経纂堂本『帝王世紀』の影印本を加えて一冊となる。現在のところ、各分担者の論文と『訳注』は執筆中であり、「上海図書館蔵経纂堂本『帝王世紀』の影印本」は既に現地出張を通して入手済みである。

以上、表題のプロジェクトの進行状況並びに成果についてまとめてみたが、全体的にいえば、共同執筆の部分は各研究者の校務が多忙のため、やや延滞気味である点が否めない。これをスムーズに進めるために、日頃全員との連絡を欠かさないよう心がけている。貴財団の助成なしには二つともできなかつたことを、一年を終えて痛感しており、この点、出版物が世を問う時点で明記するつもりである。

#### 研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

『古事記と東アジアの歴史世界』（王小林著、汲古書院、2017年7月交付予定）

『帝王世紀と古代日本』（王小林、陳偉、陳致、稲畑耕一郎著、汲古書院、2018年交付予定）